

マルカタ南魚の丘遺跡出土彩画片の一考察
— ローゼット文を中心として —

吉村 作治*

**A Study of the Fragments of Painted Wall from
the Ruin of Kom el-samak at Malqata South, Egypt.
— A Consideration of Rossete Pattern —**

Sakuji Yoshimura

Abstract

In 1973, the Waseda University Egypt Archeological Mission discovered the Kom el-Samak ruins in Malqata South, on the west bank of Luxor City, Qena, in tThe Arab republic of Egypt. Between that time and 1980, excavations were carried out at the site in which over ten thousand fragments of painted wall were unearthed. Because there were no other relics unearthed at the site, in order to inquire into the purpose of the structure it was necessary to analyse the fragments of painted wall and compare them with murals found in other ruins.

Although over ten thousand fragments of painted wall were unearthed, many of them were without pattern, and in the end more time was spent in scientific procedures to prevent mixing of the colours on the painted fragments and breakage of the smaller peices than on classification and consolidation.

This papaer takes up the issue of the Rosette pattern discovered in the painted wall fragments, and examines the possible function of this pattern as decoration in the ruins at the site.

1

早稲田大学古代エジプト調査隊は、1971年にエジプトアラブ共和国ケナ州ルクソール市西岸、マルカタ南に於いて発掘調査を開始した¹⁾。そして、1973年同地区リビア砂漠縁にて砂に埋もれた遺跡「魚の丘」を発見した。遺跡はその後の調査により、新王国時代（前1567年頃～前1130年頃）18王朝期（前1650年頃～前1379年頃）のものとなった。その後4年にわたって発掘が行われ、数千点

の彩画片が出土し、遺構が完全に掘り出されたが、同遺跡の建築目的は、残された同王の他の記録にも全く載っておらず未だに確定できない。そのため、11456点のにはる彩画片²⁾の分析検討が必要とされ、そのため同時代の貴族墓の壁画を比較検討のため調査した³⁾。

1978年の調査終了後、同遺跡の建築目的解明のため研究がなされてきた。そして建築班の研究により、同遺跡は少なくとも1回の増改築が行われていることがわかった。美術考古班は出土された

* 人間基礎科学科

* Department of Basic Human Sciieces

彩画片を分類整理することにより、そのモチーフから同遺跡の建築目的を解明すべく研究を重ねてきた。11456点の出土彩画の多くは黄色の無地のものであった。しかし出土後小片に崩壊してしまいその復元に手間どった。又彩色の退色や小片になってしまうことを防ぐための化学処理に多くの時間をとられた。又出土地点と出土状況の再検証が必要となり、彩画片の台帳の作り直しにも多くの時間をとられた。これらがこの研究成果発表が遅れた理由である。尚、1983年に出版された報告書⁴⁾に於いて概略の報告を行ったがその後全点を再検討し直している。

出土した彩画片を大きく分けると、(1)幾何学的な文様、(2)物語り性を持った絵画的な図像、(3)無地となる。(1)の幾何学的な文様は(a)天井に描かれたもの、(b)壁面に描かれたもの、(c)底面に描かれたものに分けられるが、本遺跡から(c)らしいものはほぼ出土されていない。(a)はパターン化された連続文が多く、ロータスの花の正面形を文様化したローゼット文やスパイラル文、スクロール文、市松文、ジグザグ文などが多い。

(b)の壁面に描かれている文様は同じ連続文でも天井などに描かれている面的な広がりを持つ連続文とは異なり、ライン状をなしている。この目的は壁面間の区切りや壁面と天井、壁面と底面を区別するためのものと、場面を上下や前後と区切るために使われている。これらをボーダー文とよんでいる。こうした連続文の系統は面や線を均一に埋め描きをするため、効率をよくするためなるべくデザインをシンプルにさせている。しかし古代エジプトではアムレットとよばれる護符にもみられるように、簡素化した形象の中にもその図像が本来もっている意味すなわち象徴性や神秘性を包含させているのは言うまでもない。又、(2)の物語り性をもった絵画的な図像は大きく分けて(a)人物、(b)建物や家具、(c)器物類、(d)動物、(e)植物、(f)その他に分けられる。この図像の中には衣類、贈物や建物の装飾のため描かれている幾何学文もある。以上の分類を実際に魚の丘遺跡から出土した彩画片の数と面積をあてはめてみたい。彩画片の総点数は前述のように11456点であるが、総面積はというと約9㎡分となる。一点平均の面積が7.7cm²とな

り、かなり小さいものと感じられるが、この中には黄地の小片が4508点、約2㎡分含まれているので、これを除いた数値に直してみると、点数は6948点となり面積は約7㎡分で、1点当たりの面積は10cm²となる。この中にはかなり小さい彩画片も含まれているので、普通に判別できる破片となると15cm²~20cm²である。(1)の幾何学的な文様は680点、約1.7㎡であった。(2)の物語り性をもった絵画的な図像を含んだ破片は1046点、約2.4㎡。それをもう少し小さく分類すると、(a)人物に関するものは858点、約1.7㎡、(b)と(c)で146点、約0.5㎡、(d)動物は12点、約0.07㎡、(e)植物30点、約0.09㎡となった。この他に(f)モチーフが複合しているもの88点、約0.3㎡破片が小さすぎたり、(g)図像の部分だけしか残されていないため判別困難なもの5115点、約3㎡となっている(以上のデータは1987年のもの)。今後の課題としては、(g)の判別不明破片を他の例と比較しながら判別していくこと、すでに判っているモチーフの周辺部のシーン復元を行っていくことである。

本稿は上記中の(1)の(b)の中の最も特徴的な文様「ローゼット文」について出土したうちの24例を中心に述べてみたい。

2

本稿で問題とするローゼット文とは花紋の一種で、開花した花を上から見た形を図式化した装飾又は文様である。この場合ローゼット文は何の花を模したものであるかをまず考えてみたい。古代エジプトでは2つの花が王国の象徴として取り上げられていた。言うまでもなくロータスとパピルスである。無論この2つの花の他にハナゲシ、ヤグルマギク、ヒエンソウなど多くの花が存在していたが、なんといっても上記の花は古代エジプトを代表する花であった。ロータスは上エジプト、パピルスは下エジプトの象徴として古代エジプト3千年間国花として崇められていた。パピルスに関しては紙の原義でもありよく知られない部分が多い。ロータスはハス属に属す双子葉植物であるが、スイレン科とハス科の方を指す。又白蓮、青蓮、紅蓮の3種類があるが、王朝時代には前2者の白蓮と青蓮のみが生息していた。ただし壁画等

に描かれているロータスは青蓮で芳香を発するため特に女性に愛用されていた。古代エジプト人はナイル川の増水時期になると開花するロータスを生命と生産を象徴するものと崇めていた。又日のが沈むと水面下に沈み、朝陽が昇ると水面に出、花が咲く姿を見て復活再生をも象徴すると考えた。そのためミイラとともにロータスを埋葬したり、葬儀の飾り花としてブーケにし、開口の儀式に捧げた。航海に出る船や巡礼船のマストにロータスを飾ることにより、無事に帰還することを祈願した。復活再生を願ったからである。ロータスはオシリス神の神像を飾ることもあったが、伝説によると、オシリス神の子ホルス神を生んだイシス女神の化身とも言われている。リーグル⁵⁾によると古代エジプトに於いてはロータスは三様の図形で装飾として表されているとのことである。(1)は正面形であり、(2)側面形、そして(3)半側面形である。そしてこの(1)の正面形こそがローゼット文であると言っている。これに対しグッドイヤー⁶⁾はロータスの子房を写したものであるとしている。どちらにせよローゼットはロータスの花であるとしているのだが、名称からいくとローズはすなわちバラに近く、日本の皇室の御紋から連想するとキクとも考えられる。後者のキク説については現在考察する資料等手はないが、中国から伝わる時蓮から菊にその形状が似ていることから、間違ったという説もある。前者のバラ説については考える余地がある。というのも、中世ヨーロッパに於いてはローゼットとは別に同じような文様をローゼス⁷⁾と呼称していることを考え合わせるとローゼットがバラと何らかの形で関連するのではないかと思われる。又古代エジプトの時代にもバラは存在していたし、イシスに捧げられる花のひとつでもあったことから知られるように、バラは重要な花であった。ロータスの正面形がローゼット文という名称になった経緯は今のところ資料がないため明らかではないが、ローゼット文の起源がエジプトではなく他の国であるという説も出ている。例えばルドウィヒ・フォン・ジーベル⁸⁾が、エジプトではローゼットが装飾文様として多様されたのは起源前15世紀頃からであったのに対しカルデヤ人はすでに起源前16世紀には使用していたとその書に

於いて述べている。又最近オーストリアのウィーン大学のビータク⁹⁾はエジプトデルタ地帯東部のテル・アル＝ダバア遺跡から東地中海に於ける交流を示す多くの資料を発掘したが、その中にはミノア文明タイプのフレスコ壁面片を発見した。このことから第2中間期(起源前15世紀頃～17世紀頃)には既にミノア文明がエジプトに入ってきた証拠であると述べている。このことは従来エジプトからクレタに影響を与え、それがギリシア本土に伝播したと考えられていた説が覆えされることになる。ということは、クレタのクノッソス宮殿の内部壁画に描かれているローゼット文は起源がエジプトではなくむしろミノア文明が作り出した装飾文であるという可能性も出てきた。そうなるならローゼット文がエジプトのロータスの正面形の文様化であるという説もくつがえされる可能性も出てきた。ただ、古代エジプトの古王国時代(起源前22世紀～26世紀)の彫像ラーヘテブとネフェルト夫妻像のネフェルトのヘアバンドに装飾されているのはまぎれもないローゼット文である。このことはもう少しいいないな検証が必要ではないかと思われるので、稿を改めて論じたい。

さてこういったローゼット文はどんなところに装飾として使われているのかを考えてみる。まず前述したヘアバンドのデザインをはじめとするアクセサリなどに使われていた。特にボタンや指輪、首飾り、アンクレット、ブレスレットなどである。又器物のデザインとしてワイン容器、御輿の棒の先などの家具類、宝石箱の図柄にも多く彫られたり、描かれたりされている。アムレット類のデザインとして例えばベス神の頭部やセクメト女神の像、ウジャトの眼の部分やスカラベの一部に彫られている。又木棺の表面の場合、ローゼットとロータスの側面形、パピルスの側面形が組合わさっているものが木棺の胸のまわりを装飾するのが多い。又バルメットとの複合デザインも少なくない。以上の例に比べて量的にはやはり建造物の内部装飾としてのローゼット文は数的には多い。ローゼット文が建造物を装飾するために使われる場合は天井を埋めるものと、壁と壁、壁と天井、壁と床の境界を示すためのボーダー文として使われるものと、建造物の開口部の周囲を飾るものが

ある。

3

いよいよ本題の魚の丘遺跡出土の彩画片の中のローゼット文について考えるわけだが、出土例は約70例ある。本稿ではその中の24例を図化して考察を行うことにする。それ等彩画片の出土した年は、1974年が2例、1975年が8例、1977年が11例、1979年が1例、不明が2例、そのうち1974年から1975年か不明というのが1例となっている。発掘の進展から、1974年度と1975年度は東階段と大丘上の発掘だったので、第2期の建物の残存物の一部と考えられ、1977年以降の発掘は西スロープ

内だったため、第1期の建物の壁面の一部と考えられる。よって図番号1から10までと、22の11点と図番号11から21と23の違いが何か出るならば、墓壇上に建てられていた2つの時期の建物の特長がわかる。但し大丘階段上と出土地点のある図番号8と9については、西スロープの中から出土した例と同じく、第1期の建物の一部を第2期の建物を造るために投げ込んだものと考えられることができる。しかし出土レベルを調べてみると、西スロープの平均レベルは79.3なのに対し、大丘階段上のは80.70であり、大丘頂部のレベル81.2に近似していることから、第1期のものか第2期のものかの判別は難しいといえる。

本稿で取り上げたローゼット文を伴う彩画片リスト

挿図	遺物番号	調査年次・出土年月日	出土地点
No.1	127	3次(740120)	大丘頂部
No.2	176	3次(740120)	大丘頂部
No.3	38	4次(741228)	大丘頂部・崩落
No.4	40	4次(741228)	大丘頂部・崩落
No.5	359-A	4次(750118)	大丘頂部階段西縁上
No.6	359-A	4次(750118)	大丘頂部階段西縁上
No.7	373-B	4次(750119)	大丘頂部階段西縁
No.8	375-D	4次(750119)	大丘西階段上
No.9	375-D2	4次(750119)	大丘西階段上
No.10	416-G	4次(750122)	大丘頂部階段西縁裾
No.11	なし	6次	西スロープ
No.12	89	6次(770106)	西スロープ
No.13	101	6次(770109)	西スロープ
No.14	158	6次(770113)	西スロープ
No.15	158	6次(770113)	西スロープ
No.16	158	6次(770113)	西スロープ
No.17	158	6次(770113)	西スロープ
No.18	142	6次(770112)	西スロープ
No.19	168	6次(770117)	西スロープ
No.20	204	6次(770117)	西スロープ
No.21	233	6次(770125)	西スロープ露台下最北部
No.22	なし	3次又は4次	不明
No.23	なし	8次	不明
No.24	なし	不明	不明

以上が図化できたローゼット文の彩画片であるが、前述のようにこの他に9点の図化の難しい破片と3点の発掘中の写真は取ったのだが現物の行方がわからないものと、建築班の記録にはあるのだが現物が見当たらないものが3点ある。これを年次別に分けると、1974年度のもものが8点、1976年度のもものが6点、年度不明のもものが1点ということになる。

魚の丘出土のローゼット文は花卉が12あり、花の外郭を丸く描いている。中には同心円を描きその中を12等分したり、10等分する簡便な描き方のものもあるが、多くのものはていねいに描いてある。というのは魚の丘に建てられた建物が存命中の王のものであったからであろう。花の地は白で中心の芯の部分は赤又は青の彩色がなされており、花の外側の部分も赤又は青で彩色されている。赤と青の使い分けは、芯の部分が赤の時は外側が青、芯の部分が青の場合は外側が赤というように交互になっている。そして連続してローゼット文を描く場合、この2つのパターンを交互に繰り返していく。それに対してマルカタ王宮出土のローゼット文の場合はローゼット文とスパイラル文の組み合わせやローゼット文が平面的に広がって組み合わせているケースがあったが、魚の丘の場合は1個だけ出土したものを含めて直線的に複数並んでいるケースのみであった。それを最も明瞭に表しているのは図番号4と24である。一方ローゼット文の花卉の直径の長さであるが、手描きでざっと描いたものが多く、大ざっぱな数字になってしまうが次のとおりである。

図化されているもので、1973年度出土のものは、8.7cmと9.1cm、次に1974年度出土分で図化されているものは、7.2cmのもものが2例、7.4cm、7.5cm、8.4cm、8.5cmが各1例ずつ、そして8cmが1例となっている。図化されてないものでは、7.1cm、7.2cm、7.4cm、7.5cm、9cm、10cm、10.5cm、11cmが各1例ずつとなっている。これらに分ける場合7.472cm前後と9.34cm前後の2つのタイプに分けるのが良いと思う。というのは、古代エジプトの長さの基準の最小単位であるデジット¹⁰⁾が1.868cmである

ことからくる。古代エジプトでは割り付けをする時、整数を用いていたのだからメートル法で表せば不整数であっても割り付けの精神は整数となるからである。すなわち、7.472cmは4デジットで、7.34cmは5デジットとなる。このことを踏まえて上記の例を分析すると、(1)4デジット・タイプは1974年度に1例、1975年度に8例、1977年度に6例となる。(2)5デジット・タイプは1974年度に1例、1975年度に3例、1977年度に0例となる。(3)その他のものは、8cmから9cmといった4デジットと5デジットの中間のもので、1974年度に1例、1975年度に4例、1977年度に5例ある。これを4.5デジット・タイプとするか、4デジットと5デジットにふり分けるか意見が分かれるところであるが、整数を重んじた古代エジプトの設計理念を生かして、8.4cmまでを4デジット・タイプに、それ以上を5デジット・タイプにくり入れたいと思う。そうした上で再度分けると、(1)4デジット・タイプは、1974年度0例、1975年度11例、1977年度14例。(2)5デジット・タイプは、1974年度2例、1975年度5例、1976年度0例ということになる。その他に不明や計測不可の分が4例あるがこの際不明分は抜かして考えることにする。さて以上の花卉の直径の計測から何がわかるかということ、第1期の建物から出たローゼット文はほぼ全て4デジット・タイプのものであるのに対し、第2期の建物のもものは4デジット・タイプのもものが11例に対し5デジット・タイプのもものが7例もある。すなわち第2期の建物では2つのタイプのローゼット文を使っていたことがわかったのである。この結果によりマルカタ王宮址より出土したローゼット文と魚の丘出土のローゼット文を比較考察した、「マルカタ王宮に関する研究(10)¹¹⁾」は再考せざるを得ないが、同論文の結論について異議をはさむものではない。

さてローゼット文の描かれ方については前述したが、もう少し詳細にみてみよう。渡辺保忠教授¹²⁾は報告書の中で魚の丘出土のローゼット文について次のように述べておられる¹³⁾。

「出土資料のすべては、大玉縁があってその下側にはローゼットの文様帯が位置することを指し示すことになる(以下略)」

「ローゼット文帯は大玉縁の下側か、あるいは開口部に接する側即ち大玉縁の内側に必ずあるという原則が生まれる（以下略）」

「この縁取りも含めた帯状につづく文様全体をここでのローゼット文様帯とすると、この文様帯が開口部の縁を取り巻く装飾である（以下略）」

渡辺保忠教授は繰り返し述べられているように、ローゼット文は魚の丘建造物の開口部のみに使われたということである。それは当時建築班に資料がわたってないためと思われる。そこでもう一度出土彩画片をひとつひとつ再検討することにした。確かに渡辺教授のご指摘のローゼット文破片が多い。例えば図番号2には明らかに開口部右上角の部分を示しており、その他の図番号4, 8, 11, 13, 15, 16, 18, 19, 20, 24に於いては同教授の理論が通りなのだが、図番号14は白、青、白の3本のラインの外側両サイドに黄の面がある。同教授の論でいくならば、どちらかが大玉縁で、どちらかが開口部すなわち何も無い状態でなければならぬのだ。そして、図番号3, 21, 22に於いてはローゼット文の脇の白、青、白の3本ラインの外側に人物の一部が描かれている。図番号3は人物の頭部が床面に伏すような又はおかむような形で描かれており、図番号21は人間の足が床を踏むような図像である。図番号22に関しては不明であるが、人物の一部を示しているようだ。故にこの3つの破片は物語り性を持った壁画的な図像の中の人物のところへ再度入れて壁画のモチーフ解明に使う必要がある。すなわち少なくとも4つの彩画片は、ローゼット文が開口部以外でもボーダー文として使用されることを示している。

図番号3と21は床の下方にローゼットの連続文を配し、実際の建物の床との区切りを示したのであろう。図番号14はローゼット文の両側、それは上下か左右かはこの図像だけでは明確ではないが、少なくとも2つの空間を分けるためにローゼットの連続文を使ったと考えていいと思う。

さて人物が図像に存在していることと、建造物の建設期との関係はあるのか見てみたい。図番号3と22は第2期、同21は第1期のものであることからこのケースでは数も少なくないこともあって区分できないことが分かった。ただ図番号3の人

が床に伏すような形のモチーフは同時代の宰相ラモーゼの墓に描かれている。そしてその人物が王や高貴な人物に対して礼拝している図であろうから、この壁にはおそらく王の姿が描かれていたと考えられる。これは壁面復元には重要な破片といえる。

再びローゼット文の大きさに戻るが、2つのタイプのローゼット文が存在するという事は、開口部について考える場合、開口部の大きさが少なくとも2つ以上あったということの意味するのではないだろうか。もしこの2つのタイプだけとするならば、正面と裏の門の大きさが違ったということであろうし、開口部まわりのローゼット文と壁面を分けるためのものかもしれない。又縦に使う時と横に使う時の違い、上と下に使う時の違いなど考えることができる。以上のことを出土例に合わせて検討してみたが、開口部まわりのローゼット文と床面を示すためのローゼット文の直径の差はなかった。故に大きさの差はいくつかのタイプの門がこの建物にはあったと考えるのが現状ではいいのではないだろうか。但し1期の建物には4デジット・タイプのものしかないということ、開口部は一つしかなかったということになり、ここで結論づけるのは少し無理があるかもしれない。今後モチーフ判別が難しいとされている彩画片を検討考察していく過程で、現在ペンディングとなっている破片の意味がより多く解明されると思われる。

(注)

- 1) 報告書「マルカタ南 (I) 魚の丘」。早稲田大学古代エジプト調査委員会編、早稲田大学出版部。
- 2) 建造物の内壁を装飾していたものが建造物の破壊で破片になったもの。
- 3) テーベ西岸貴族墓調査報告。早稲田大学古代エジプト調査委員会編。
- 4) 前掲書
- 5) リーグル美術様式論 装飾史の基本問題, アロイス・リーグル著・長広敏雄訳, 岩崎美術社。
- 6) W.G. Goodyear: The grammar of the Lotus, a new history of classic ornament as a development of Sun Warship, London, Sampson Low marston & co. 1891.
- 7) Rosace
- 8) Ludwing V. Sybel, Kvitik des egyptischen ornaments s. 17, 1883.

- 9) Prof. M. Bietak : 1991年9月2日イタリアのトリノ市で開催された第6回国際エジプト学会議での発表関連論文として PETER M. Warren : The Minoan Civilisation of crete and the Volcano of Thera, Journal of The Ancient chronology Forum (JACT), Vol IV, 1990と Tell ed-Daba News Report, Ancient Avaris Amazes Again, Devid M. ROHL, JACF 1991がある。
- 10) 身体尺キュービットの最小単位で指の幅が基準となっている。
- 11) 日本建築学会昭和61年度大会学術講演梗概集, 9130 マルカタ王宮に関する研究(10)。
- 12) 早稲田大学理工学部建築学科教授, 工博。
- 13) 「マルカタ南 (I) 魚の丘」建築編, 早稲田大学出版部。

参考文献

(1) 和書

1. リーグル美術様式論 装飾史の基本問題, アロイス・リーグル著, 長広敏雄訳, 岩崎美術社。
2. シーンボリズム 象徴の比較文化, ランシ・C・クーパー著, 日下洋右・白井美昭訳, 彩流社。
3. 花の歴史 リュシアン・ギョー, ピエール・ジバンシ著, 串田孫一訳, 白水社。
4. 模様の事典 岡登貞治編, 東京堂出版。
5. 植物誌 テオフラストス著, 大槻真一・月川和雄訳, 八坂書房。
6. 装飾芸術論 E.H., ゴンブリッチ著, 白石和也訳, 岩崎美術社。
7. マルカタ南・建築編 早稲田大学古代エジプト

調査委員会編, 早稲田大学出版部。

8. オーウェン・ジョーンズ編, 世界装飾文様2020, 学習研究社。

(2) 洋書

1. Sir W.M.F. Petrie : Tell el Amarna Aris & Phillips Ltd., London.
2. Sir W.M.F. Petrie : Buttons and Design Scarabs Aris & Phillips Ltd., London.
3. W.C. Hayes. : Glazed Tiles, from a Palace of Ramses II At Kantir, The Metropolitan of Art, New York.
4. Cyril Aldred : Jewels of the Pharaohs Thames and Hudson London.
5. Flinders Petrie : Decorative Patterns of the Ancient World for Craftsmen, Dover Publication, Inc. New York.
6. William A. Ward : Egypt and The East Mediterranean 2200-1900 BC, American University of Beirut.
7. Eva Wiison : Ancient Egyptian Designs Bmp
8. Alexander Badawy : A History of Egyptian Architecture University of California Press.
9. Edited by Cyril M. Harris : Illustrated Dictionary of Historic Architecture, Dover Publications, Inc., New York.
10. Sir. W.M. Flinders Petrie : Egyptian Decorative Art Methuen & Co, London.
11. William. C. Hayes : The Scepter of Egypt, The Metropolitan Museum of Art.
12. Robb Dep. Tytus : A Preliminary Report on the Re-excavation of the Palace of the Amenhetep III. The Winthrop Press New York.

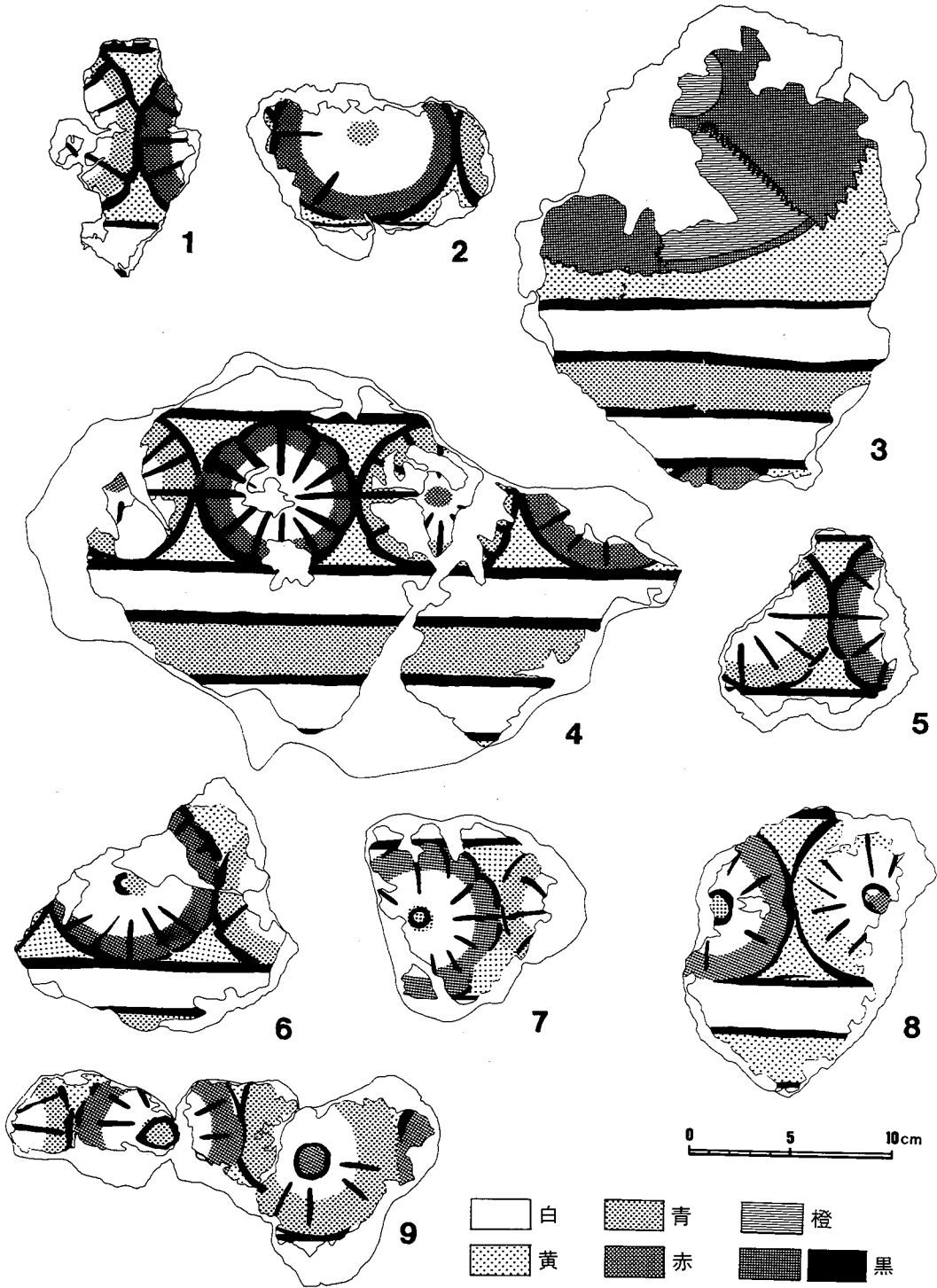


図1 本稿でとりあげたローゼット文様を伴う彩色画片(1)

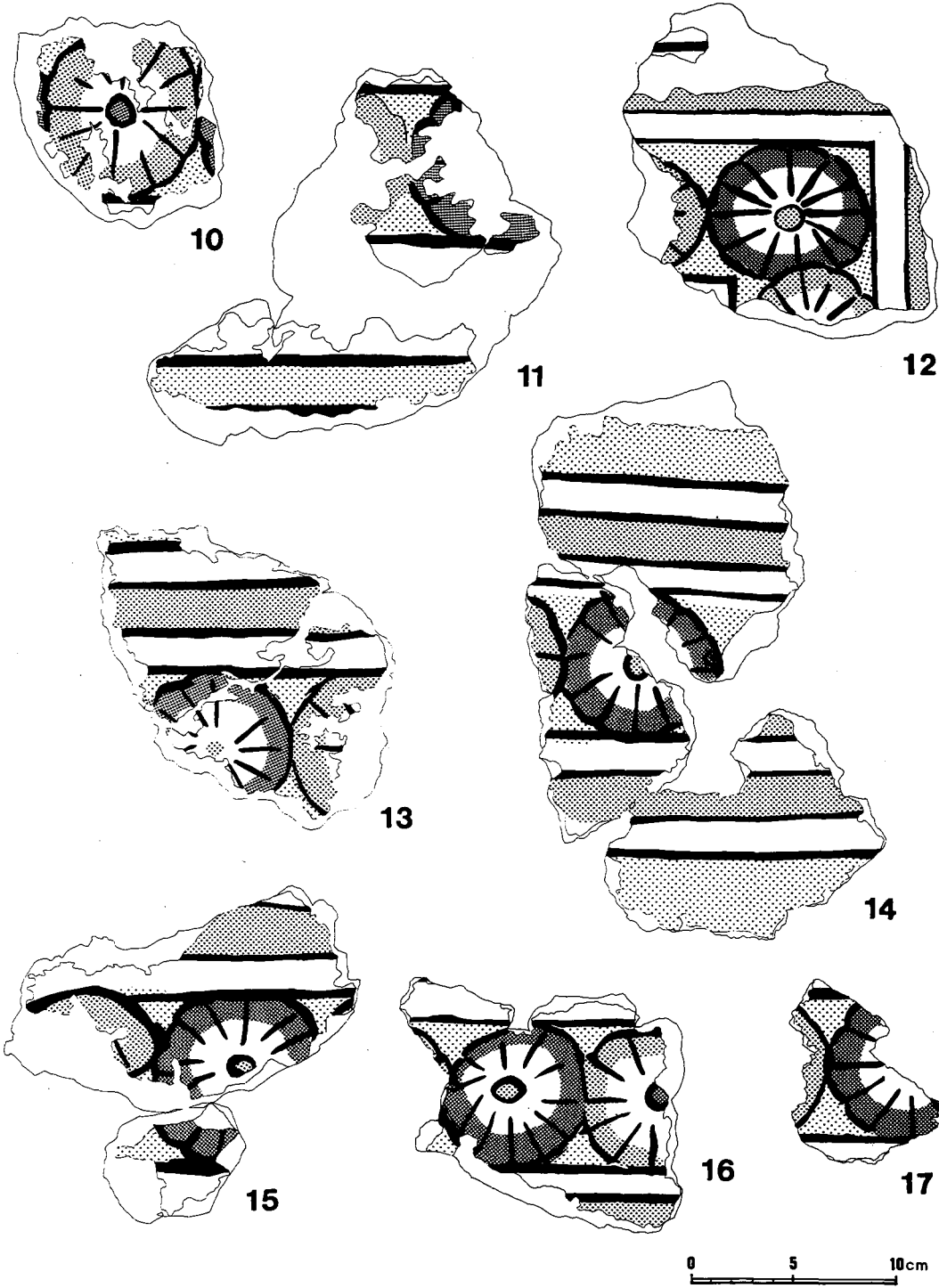


図2 本稿でとりあげたローゼット文様を伴う彩色画片(2)

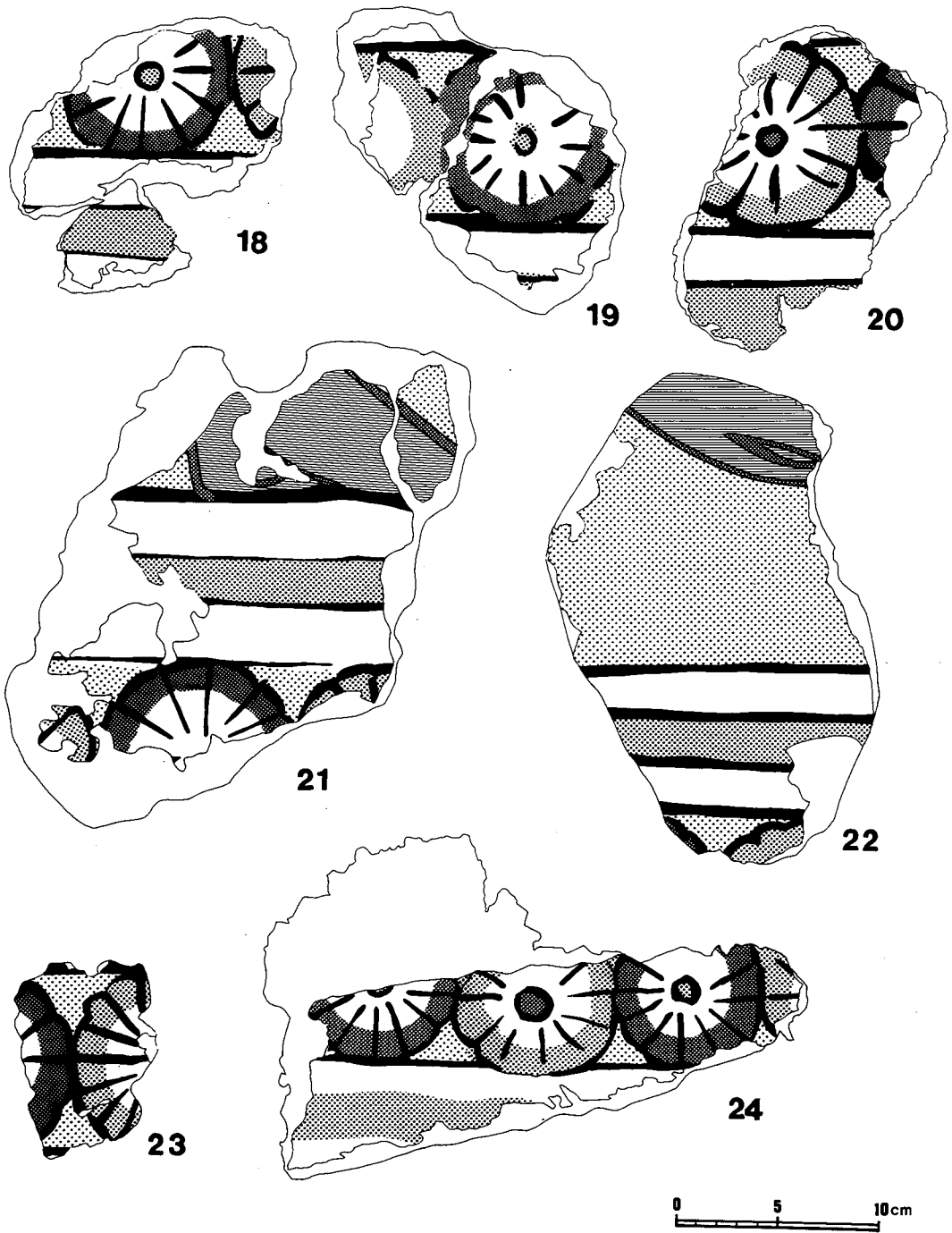


図3 本稿でとりあげたローゼット文様を伴う彩色画片(3)